

尙ほ辭せざるの風ありと。中佐更に杯を原氏に擬す。氏も亦酒味を解せず。由佐曰く『予の酒に於ける何ぞ夫れ多福なるや』と獨酌滿飲、一座相見て哄笑す。

八、伊犁以來の乗馬と別る

三十日、稻垣中佐と共に大佐ヤングハスバンド氏を訪問せんとす。然るに同大佐は、昨日ジャンムーに避寒せり。因て副官某大尉を其官邸に訪ひ、予か乗馬を大佐に寄贈せんことを依頼せしに、副官之を快諾したりき。該乗馬は既に記せし如く、伊犁副都統より惠贈せられし喀喇沙爾の産にして、骨格逞しき蘆毛の駿馬なり。回顧すれば伊犁出發以來、天山に南路に、將た崑崙、ヒマラヤの峻嶺に、偕に共に寒暑を凌ぎ難路を跋涉し、予か旅行の忠僕たり伴侶たりしも、今や無事に任務を果し既に歸朝の期に逼れり、情に於て之を土人の手に委するに忍びず、然れども之を我國に携行せんには、莫大の費用を要す乃ち已むを得ず茲に訣別せざるべからず。之を大佐に贈らは馬も其主を得たるを喜ぶべしと思ひしが、其不在を聞き一たびは落膽せしも、幸に副官の予が意を諒し快諾せる有り大に心を安んじたり。